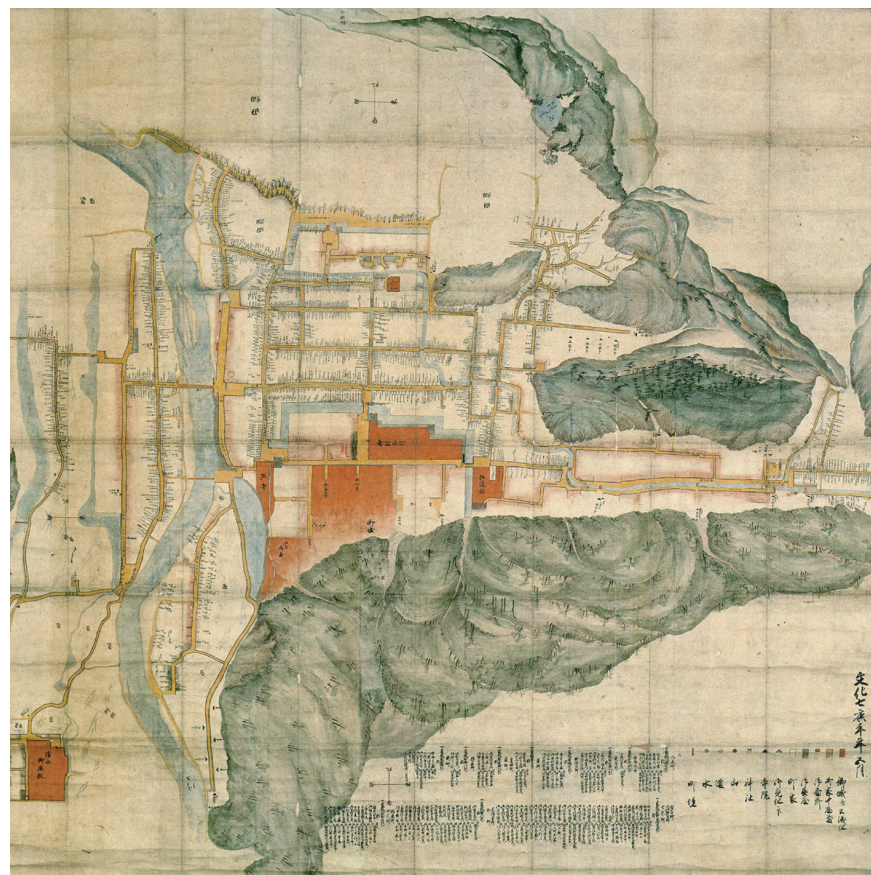


出石城下町の歴史



出石城下町絵図 文化7年



出石大名行列 明治37年



昭和初期の田結庄通り



辰鼓楼改修風景 昭和4年



現在の出石城下町

城下町の沿革

出石城下町は、江戸時代に入った慶長9年(1604)ごろ、出石藩主小出吉英(こいでよしひさ)が有子山頂の山城を廃し、山麓に平山城(出石城)を築いた時期に、城を中心として本格的な整備が行われました。

吉英は城の周囲に内堀を掘らせ、また、当時の谷山川と出石川を結んで外堀に利用しました。さらに町の出入口には要塞を兼ねた寺院を配し、碁盤目の町筋をつくるなど城下町建設に尽くしました。

小出氏は藩主として9代、約100年間続きましたが跡継ぎがなく断絶し、元禄10年(1697)にこれを継いだ松平氏は、すぐに宝永3年(1706)に信州上田の仙石政明(せんごくまさあきら)と国替えとなります。以後仙石氏は7代にわたって出石藩を治めますが、天保6年(1835)の仙石騒動により、3万石に減封され、明治に至っています。

城下町の賑わい

但馬を代表する5万8千石の出石藩は、丹後宮津藩、丹波篠山藩とともに三丹地方きっての雄藩として知られるようになります。また、その城下は出石城下三千軒と謳われた政治経済の中心地となりました。

城下の町数は町方17町、武家町が9町。町方の人数は、明和8年(1771)5713人、文化12年(1815)4920人、天保11年(1840)4499人でした。また、当時の家数は、明和8年1411軒、文化7年(1810)1320軒、天保11年1399軒(町方、社寺、水上村、長砂村含む)でした。

なお、明和8年の町家の職業構成は、大工が68軒で最も多く、次いで魚屋32軒、桶屋26軒、酒屋23軒などと続きます。特に鋳物、鍛冶屋が多く、鍋、釜などの鋳物生産は、但馬国の中心地をなしていました。



大正末期のまちなみ

城下町の変遷

明治に入り、城下町は大きな災厄に見舞われます。明治9年城下町の東に位置する入佐町の一隅から発した火が、城下町の中心部を含む3分の2を焼き尽くします。生活基盤を失っていた旧士族の出石離れに拍車をかけ、この大火を境に出石の人口は大きな減少をみせます。

それでも近代化の基本整備として、出石城跡に出石郡役所、出石町役場、弘道小学校がつぎつぎに建てられます。但馬の行政の中心は隣接する豊岡に移動しますが、出石郡における行政、商工業の中心地として出石城下町は機能し続けます。

しかしその後、鉄道ルートから外れ、出石は近代産業の波から取り残されます。鉄道に恵まれなかった城下町は、その反面、日本の各都市に特有の駅前を中核とする市街地開発や無秩序な建築物の乱立といった状況とは無縁のまま今日に至ります。



辰鼓楼を望む 大正末期

重伝建(重要伝統的建造物群保存地区)選定までの流れ

近年、出石城下町は但馬の小京都として知られるようになり、年間100万人近い観光客が訪れます。昭和40年代以降の急激な観光地化に伴い、兵庫県の「景観の形成等に関する条例」に基づく景観形成支援事業や、国土交通省の街なみ環境整備事業を進めてきましたが、中心部の空洞化等、まちなみを保存するには十分ではありませんでした。

そこで、伝統的建造物群保存地区としての可能性を検討するため、平成12、13年度に保存対策調査が実施され、保存の方針が示されます。

平成18年10月には地元自治会から伝建制度導入の要望書が提出され、同年12月に「豊岡市伝統的建造物群保存地区保存条例」が制定されます。平成19年6月には「豊岡市出石伝統的建造物群保存地区」が都市計画決定され、同年12月、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。